

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 27 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530675

研究課題名(和文)瀬戸内芸術祭の外発的インパクトと内発的発展：文化・社会・経済面からの持続的検証

研究課題名(英文) Impacts of the Setouchi International Art Festival and Spontaneous Development of an Island Community: Continuous Observation from Cultural, Social, and Economic Aspects

研究代表者

中島 正博 (Nakashima, Masahiro)

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：60264925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：瀬戸内国際芸術祭が開催された離島を調査した結果、芸術祭によって人びとの交流、地域づくり活動などが活発になる等の効果が確認された。また百島住民のアンケート意識調査の結果から、アートプロジェクトによって、島内外の人々との交流・つながりや地域への愛着に、変化が芽生えている効果が判明した。但しこれらの効果の程度は、それぞれの島の経済・社会・文化の特徴により大きな差異がある。住民の評価が最も高かった離島の聞き取り調査を通して、開放的な「交流の文化」が地域再生を促進している、という内発的発展の様式を見出した。

研究成果の概要(英文)：We studied the remote islands, where the Setouchi International Art Festival was conducted, and found that there were such positive effects as islanders got to know with people who came to the islands and they were involved with activities for developing their communities. It was also found from the consciousness surveys in the Momoshima Island that the art projects in the island brought about similar effects as the Art festival. However, extent of those good effects varied among the islands depending on economic, social, and cultural characteristics of the islands. We studied an island where residents evaluated the Art Festival higher than people from other remote islands and conducted an extensive interview survey for more than three years. It was concluded that islander's cultural openness is one key to community regeneration through residents' spontaneous development activities.

研究分野：社会科学

 キーワード：瀬戸内国際芸術祭 過疎高齢化地域 外的インパクト 内発的発展 アートプロジェクト まちづくり  
 離島 住民意識調査

## 1. 研究開始当初の背景

「美しい自然と人間が交錯してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上すべての地域の『希望の海』となること」を目指して、「瀬戸内国際芸術祭」が2010年7月から10月の間、瀬戸内海の7つの島を舞台に開催された。本事業は、現代アートの作家や建築家と住民の協働によるアート「島×生活×アート」というコンセプトのもとに計画され、住民、特にお年寄りの元気を再生することを目的とした。来場者は当初予測された30万人に対して、3倍に相当する94万人に達した。本事業の社会的なインパクトは量的・質的に特筆されるところが多い。その第1は島の住民の生活や精神などの文化に与えたインパクト、第2は島の住民・アーティスト・ボランティア・地域の事業者や行政などとの間に生まれた協働のネットワーク、第3は島に新しい地域経済活動や人的交流が根付いていく兆しが見えてきていることである。

## 2. 研究の目的

本研究では、「瀬戸内国際芸術祭2010」が過疎化する島に与えた外発的インパクトを、文化・社会・経済という多様な側面から継続的に追跡調査を行い、その成果を検証する。すなわち芸術祭実施前の経緯も含めて同事業が地域に与えた影響を持続的に検証し、活力が低下した地域コミュニティが外発的なインパクトにより内発的に再生していく新たな様式を見出すことを目指す。

## 3. 研究の方法

研究の分野は地域の社会・経済・文化の側面にわたる。社会構造の調査、産業と経済の調査、アート鑑賞の来訪者による経済効果、そしてアートプロジェクトが島の人びとに及ぼした文化的な影響の調査である。これらの調査では芸術祭の開催地を訪問して、住民へのインタビュー、行政機関におけるインタビューと住民や産業に関する資料収集などを行う。プロジェクトのフォローアップ調査としてこれらの調査を4年間で行う。2011年度は準備段階の調査、2012年度と2013年度は本調査そして2014年度に纏めを行う。社会面の調査で重点を置くのは人びとの繋がりの変化である。すなわち島の住民が、アーティスト、来訪者、ボランティアなどどのようにつながり、その中で信頼・互酬性の規範、ネットワークというソーシャル・キャピタルの基盤がいかに形成されたのかということ、質的・量的な調査によって明らかにしたい。経済面の分析では、訪問者が地域でお金を使うことから生じる2次的な経済波及効果ではなく、アートプロジェクトが住民や地域社会に与える直接的な影響について分析を行う。具体的には、コンジョイント分析を用いて、アートプロジェクトに対する住民や近隣住民の満足度を数量的に測り分析す

る。文化面の調査ではまず島の歴史に由来する文化を文献調査により把握する。その後、島を踏査し島の住民にインタビューを行い文化的な特徴を確認する。文化的な側面として島の伝統的な生活様式とその変容、島の伝統や自然に対する思いや誇り、アートプロジェクトとの関わりにより生じた価値観の変化の有無、その価値観の変化が人びとの生活に及ぼしている影響などを調査する。

## 4. 研究成果

(1) 本研究を実施するに際し、瀬戸内国際芸術祭の舞台になった島に加えて、瀬戸内海の百島(尾道市)においてもアートプロジェクトのインパクト調査を実施した。その理由は、第1回の同芸術祭(2010年)の実施後に研究活動を開始(2011年)したため、芸術祭が実施された島でアートプロジェクト実施前の住民意識をアンケート調査で量的に把握することは困難であったが、百島ではアートプロジェクトの開始(2012年)が本研究の期間中であり、プロジェクト実施前と後の住民意識を量的に把握し比較することが可能であったためである。

(2) 瀬戸内国際芸術祭が開催された離島での調査により以下の成果が得られた。まずアートプロジェクトが地域社会に及ぼすインパクトを事例に基づいて考察した。大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭の先行研究や現地調査を検討した結果、地域の話題や活気が生まれ、人びととの交流、地域づくり活動などが活発になるなどの効果が確認された。瀬戸内の島々では、島外ボランティアや島外の人びととの交流が芸術祭後もそれぞれの島で続いている。交流の促進・拡大は人の生活様式であり、地域の文化としてさらに発展する可能性がある。

(3) 瀬戸内国際芸術祭が開催された島々の内、4島の現地での聞き取り調査によって、それぞれの島の固有性が大きく、地域インパクトの内容や程度が異なることが分かった。何れの地域においても、島外ボランティアの若者と地域住民の交流は地域の活性化に大きく寄与している。観光客やボランティアやアーティストとの交流は、地域住民の生活の質に貢献している。地域インパクトにはポジティブインパクトがあるものの、ネガティブインパクトも存在する。前者を促進して後者を抑制するには、芸術祭主催者の配慮と地元住民の積極的な参加が必要である。ネガティブインパクトの典型は住民生活を阻害する交通や生活施設の混雑である。また住民の生活領域に作品が設置されるので、住民の日常生活が侵害されないよう、観光客のマナーの向上が大変重要である。本質的には訪問地の生活領域や文化を尊重する観光客の態度の問題である。観光文化の進化が求められる。さまざまな局面において「交流」が重要であ

る。住民、アーティスト、ボランティア、観光客などの交流がプラスの効果を増幅する。特に高齢者の福祉や生活の質に貢献する、地域づくりの最大の課題が「交流」である。芸術祭が地域に残せる最大の効果は「交流の文化」の促進である。過疎高齢化社会における地域づくりの要は先ずは「交流の文化」の促進である。

(4) 本研究では過疎化する瀬戸内海の離島、特に男木島住民によるまちづくりの活動と町の活性化の要因を重点的に考察した。男木住民は芸術祭以前からまちづくりの努力を続けていた。住民がまちづくりに励んできた直接の契機は、止まらない過疎高齢化に対する危機感である。生徒の不在により小中学校が休校になり、住民の高齢化で祭りの存続も危ぶまれたことは、その危機感を最も高めた男木の現実であった。過疎高齢化の危機感はいくつかの島が共有しているが、それは必ずしもまちづくりの成果につながっていなかった。2010年に実施された芸術祭の7つの島の中では、住民による芸術祭の評価は男木島が最も高かった。そして2013年の芸術祭では、過疎高齢化を緩和するために住民が最も望んでいた、若い家族のUターンが男木島で実現した。その結果、休校していた男木小中学校の再開が実現した。学校の再開は男木島のまちづくりの効果が明確な形で表れ始めた段階として重要である。そのような男木住民のまちづくりの力はどこから生まれたのか、4年間に亘る男木住民への聞き取り調査を通して探った。

(5) 住民からの聞き取りによると、まちづくりの力は男木住民に伝統的に備わった文化的な「開放性」に起因していると考えられる。生活のための助け合いが慣習になった「コウリョク」の伝統も開放的な人間関係に支えられてきた。高齢化により男木住民のマンパワーだけでは足りなくなり、女木島や高松の市民の力を借りて、祭りなどの伝統を維持し交流を続けてきた。このような島外の人びととの「交流」に表れた開拓精神も開放性の表れであろう。まちづくりに向けて男木の住民が「団結」できるのも、住民同士の言わば家族的な人間関係が基礎にあるのだろう。芸術祭で島のお爺さんお婆さんが、観光客との「交流」を楽しんだのも開放性の表れである。都市の観光客もそのような交流を楽しみ交流の文化に癒され、そして男木島の人気は観光客の間で高まった。このような文化力を基に、第1回の芸術祭では前代未聞の「島が沈む」ほどの多数の観光客を迎え、第2回の芸術祭では多過ぎず適切な規模の観光客を迎えて、まちづくりの資金として必要な経済的効果も得ることができた。経済活動の結果として男木の文化が発展したのではなく、男木の文化力の結果として経済効果が得られた点が示唆的である。芸術祭が本土の不特定多

数の人びとに男木島の魅力を気づかせ、さらに「こえび隊」や「男木 de 遊び隊」などの特定の人びとが男木のまちづくりの応援者になった。彼らは芸術祭が開催されていない時にも男木の島づくり・まちづくりを応援しており、今後の男木島再生の力になる大切な存在である。

(6) 過疎高齢化が進む瀬戸内海の離島、尾道市百島町を対象にして、アートプロジェクトのインパクトを調査し得られた成果は以下の通りである。この島で芸術活動が展開されている。広島市立大学芸術学部の教員(研究分担者)と学生が中心になり始めた芸術活動である。アート作品の主な展示会場は「アートベース百島」である。アートベース百島は旧百島中学校の建物を利用した芸術活動のための施設である。このアートベース百島での展示に加えて、百島で空き家になった民家に作品群を展示することも同時に行われた。この芸術活動の舞台の百島町は過疎化しており、2014年1月の人口は553人である。百島の人口は2,889人(1950年)まで増加したが、以後減少し続けて今日に至っている。百島の島民は過疎化を憂慮し、UターンやIターンにより人口の減少傾向が緩和されることや、島外の人びとが島を訪れて島に賑わいが生まれることを望んでいる。そのようなまちづくりの効果がアートベース百島にも期待されている。

(7) アートベース百島の展覧会に先立って、アートベース百島に対する百島住民の意識調査を、アンケート質問票によって筆者たちは2012年10月6日から同22日にかけて行った。まちづくりとの関連で先ず住民の芸術活動に関する意識を把握しておくためであった。アートベース百島の作品展示を実施して、百島住民の意識がどのように変化するか、あるいはしないかを考察するためには、展覧会の前と後の比較をすることが必要であると考へた。この第1回の意識調査の後、第1回のアートベース百島の作品展が2012年11月4日から11月24日まで開催された。さらに第2回の作品展が2013年10月12日から11月30日まで開催された。これら2回の作品展覧会の後、百島住民の意識の変化を把握するべく、2014年1月10日から同20日まで、2度目の意識調査を行った。アンケート調査は第1回と同じ方法で行った。以下の研究成果は、アートベース百島によるまちづくりへの貢献を、事前と事後の意識調査の比較によって考察したものである。第1回調査(事前調査)と第2回調査(事後調査)の単純集計結果の比較に関する概要と考察は、以下のとおりである。

(8) アートベース百島の鑑賞者：アンケート調査の結果によると、2か年にわたり開催されたアートベース百島の鑑賞者は回答者の

48.6%であり、百島の住民のおよそ半数が鑑賞したと推測された。第1回調査(事前調査)において「芸術活動に期待しているか」という質問に対する回答は、「大いに期待している」(21.5%)と「ある程度期待している」(40.5%)であり、期待していた人が全体の62%だったことと比較すると、本調査で示された鑑賞者の割合はやや少ない。ただ鑑賞者の割合は、第1回調査(事前調査)において「芸術作品の鑑賞や芸術・文化活動に関心」を持つと答えた回答者の割合(49.0%)にほぼ相当する。この鑑賞者の状況に関してはいろいろな考え方が出来るが、日本人の平均的な美術鑑賞の行動者率(総務省「社会生活基本調査」)は20%未満であること、現代アートが一般にはなじみが薄い芸術であること、旧百島中学校が高齢者にアクセスしにくい高台にあることなどを考えると、かなりの数の百島住民がアートベース百島の作品を鑑賞したと解釈することもできる。

(9) 芸術活動・作品に対する住民の評価：まず注目されるのは、作品鑑賞の有無に関わらずかなりの回答者が、アートベース百島の事業により「マスコミの取材などにより百島が広く知られるようになった」(38.7%)こと、また「島の人の流れが変わった」(34.2%)ことを評価していることである。アートベース百島の事業を契機に、多くの住民が、瀬戸内の百島の存在に島外の人々が注目し始めたことを実感していることがうかがわれる。一方、鑑賞者の半数以上はこの芸術活動が「おもしろかった」(58.4%)と評価しているが、回答者全体では「これまでに見たことのない作品だった」(32.9%)また「よく分からなかった」(27.0%)という回答も多く、本事業は多くの百島の住民にとっては、なじみを持ちにくい内容であった可能性もある。現代アートを面白く感じる人と関心を持ってない人の間に、様々な意識の相違を生じさせたということもできる。昨今全国的に広がりつつある現代アートを用いた地域活性化事業に際しては、現代アートには「地域の課題」や「地域の固有の価値」を発見し、「地域への愛着」を増す潜在力があると想定されている。アートベース百島の鑑賞者の25.0%は「島の文化の再発見・再生につながった」と評価しているが、これらの項目に対する評価は全般にあまり高くない。

(10) アートベース百島の参加・協力者：百島の住民にとっては必ずしも親しみやすい芸術を用いた事業であったにも関わらず、参加者・協力者が55.2%に上ったことは評価に値する。第1回調査(事前調査)において「参加・協力したい」と答えた回答者の割合より、第2回調査(事後調査)において「参加・協力した」と答えた回答者の割合が少ないことについては、住民が事業前にアートベース百島に抱いていた期待と現実の事

業に何らかの差があった可能性が考えられるが、一般的に社会貢献やボランティアの参加・協力を「考える」人の割合は、実際に社会貢献やボランティアの参加・協力「する人」の割合より高い傾向(回答者は、社会貢献などへの参加の意向を問われると、規範的な回答を選びがち)があることを考えると、本調査の結果は予想の範囲内ともいえる。

(11) 芸術家・学生・来島者との交流：アートベース百島の事業によって、百島の住民の間に様々な人との交流が増したことも注目される。アートベース百島の事業に参加・協力した人の場合は、作家、学生と何らかの形で交流した割合は40%を上回り、島内・島外の人との交流についても交流が増えた割合は38%となっている。また新しい人との交流は、アートベース百島の事業に参加・協力をしなかった人の間にも、若干ながら波及していったことも興味深い結果である。

(12) 普段の近隣・地域のつきあい、ネットワーク、信頼度、幸福度の変化：ネットワーク(地域団体への参加の有無、参加の状態)および人々に対する信頼度に関しては、事業の実施前後において、統計的な差は確認されなかった。このことはアートベース百島の事業が短期的には住民のネットワークや信頼度には影響を与えなかったことを意味するが、こうした変化が表れるまでには一般的に長期間を要するため、実態を把握するためには長期間にわたる観察が必要であり、本調査の結果は限界があることに留意が必要である。アートベース百島の事業の開催前後の比較において、指標が上昇したのは幸福度であった。反対に指標が低下したのは、近隣・地域の人とのつきあいの程度であった。仮にアートベース百島の事業の開催により、住民の幸福度が上昇したのであれば非常に興味深い結果である。近隣・地域の人とのつきあいの程度が低下したことについては、直ちに原因を考察することは困難だが、あえていうなら人間関係が希薄な都市部の状況が年々地方にも及んでいることが考えられる。なお第1回調査(事前調査)と第2回調査(事後調査)の回答者の属性はほとんど同じだったが、性別に関して第2回目は女性が多く、居住年数に関して第1回目の居住年数が長く、両者には統計的な有意差があった。後者については、30年以上の居住者数は1回目(163人)と比べて2回目(80人)は半減している。居住年数の長さや近隣付き合いの濃さの間には正の関係が予測されるため、本調査の結果から直ちに近隣付き合いが減ったと判断することは難しく、さらなる分析が必要である。

(13) 自身の変化について：上記のとおり、アートベース百島の事業の実施前後において、客観的に百島の住民の近隣・地域のつきあい、ネットワーク、信頼度、幸福度に変化

が生じたかを把握することは困難であったが、住民が主観的に自身に変化が生じたと回答している割合は一定程度あったことは特筆に値する。例えば「島内・島外の知り合いが増えた」回答者の割合は合計で 25.7%、また「地域の将来を考えることが増えた」回答者の割合は 28.6%に上った。「日常的な付き合いが増えた」、「地域の協力が増えた」、「地域への愛着が増えた」回答者も 10%~10 数%ながらあった。事業への参加・協力者に限るとこれらの割合はさらに増える。こうした変化を感じた人の割合は大きくはないが、アートベース百島の事業が存在しなければ生まれなかった変化であり、小さいながら島内外の人々の交流・つながりや地域への愛着に、変化が芽生えつつあることに注目したい。

(14) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクトは以下の通り。瀬戸内国際芸術祭の開催地の島の観察を 3 年余り継続し、百島のアートプロジェクトに関わる住民意識調査を 2 年間継続した。芸術活動のインパクトを継続調査した研究成果は国内外にまだ多くはない。その意味で本研究は継続調査の事例を蓄積することに貢献した。またアートプロジェクトを通して、人びとの交流、地域づくり活動などが活発になる効果を確認した。百島の意識調査でも同様のことを定量的に確認できた。但し活発化の程度はそれぞれの島の経済・社会・文化の特徴により大きな差異がある。また地域住民の評価が最も高かった島での聞き取り調査を通して、開放的な「交流の文化」が地域再生を促進しているという内発的発展の様式を見出した意義は大きい。

(15) 今後の展望は以下の通りである。瀬戸内国際芸術祭やアートプロジェクトが過疎化する島に及ぼしたインパクトと、それを契機とする内発的な発展すなわちまちづくりの効果は、今後さらに継続的な観察によって確認しなければならない。過疎高齢化の全国的な傾向にも拘わらず、一部の過疎化する農村や離島へ、UターンやIターンをする若い人たちが増加する動向が、東日本大震災以降に見られる。このような動向と芸術祭などによるまちづくりの内発的な努力が相乗効果を生み、過疎高齢化する一部の地域が再生する可能性があると思われる。今後もさらに事例研究を継続して、過疎地域が再生する条件を明らかにして、これからの日本社会の課題である「地方創生」を支援し実現することが切に求められる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

金谷信子、瀬戸内国際芸術祭における公

民パートナーシップ：その利点と課題、広島国際研究、査読有、20 巻、2014、75-91  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/12221>

中島正博、過疎高齢化する離島のまちづくりと芸術祭：瀬戸内・男木島の再生へ向けた住民の活動、広島国際研究、査読有、20 巻、2014、93-104  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/12222>

金谷信子、瀧俊毅、高橋広雅、中島正博、旧百島中学校における芸術活動に関する島民の意識調査から、広島国際研究、査読有、19 巻、2013、51-66  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/12175>

中島正博、過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり：アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質、広島国際研究、査読有、18 巻、2012、71-89  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/10950>

金谷信子、“協働”の再考：ローカル・ガバナンスにおける NPO と地縁団体、広島国際研究、査読有、17 巻、2011、39-53  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/9663>

〔学会発表〕(計 2 件)

金谷信子、ハイブリッド型パートナーシップとしての瀬戸内国際芸術祭、日本 NPO 学会第 16 回年次大会、2014 年 3 月 15 日、関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)

中島正博、金谷信子、アートプロジェクトは地域社会にどのようなインパクトを与えたか？日本 NPO 学会第 14 回年次大会、2012 年 3 月 18 日、広島市立大学(広島県広島市)

〔図書〕(計 2 件)

中島正博、金谷信子、高橋広雅、瀧俊毅、広島市立大学国際学部地域と芸術活動研究会、アートベース百島に対する百島住民の意識調査(事前事後調査の比較)、2014 年、71

中島正博、金谷信子、高橋広雅、瀧俊毅、広島市立大学国際学部地域と芸術活動研究会、アートベース百島に対する百島住民の意識調査(事前調査報告書)、2013 年、48

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中島 正博 (NAKASHIMA, Masahiro)  
広島市立大学・国際学部・教授  
研究者番号：60264925

### (2) 研究分担者

柳 幸典 (YANAGI, Yukinori)  
広島市立大学・芸術学部・准教授  
研究者番号：30405493

### (3) 研究分担者

金谷信子 (KANAYA, Nobuko)  
広島市立大学・国際学部・准教授  
研究者番号：20509062

### (4) 研究分担者

高橋 広雅 (TAKAHASHI, Hiromasa)  
広島市立大学・国際学部・准教授  
研究者番号：80352540

### (5) 研究分担者

瀧 俊毅 (SHIN, Shunki)  
神戸大学・経済経営研究所・准教授  
研究者番号：10432460